

視 角

子どもの目の高さに立つか？

ースコットランドで考えたことー

小玉亮子

キングス・クロス駅

ロンドンのキングス・クロス駅には、やはり、九と四分の三番線がありました。いえ、実は直接見たわけではないのですが。というのは、現在、大規模な駅構内の工事のため、柱にはカバーが掛けられていて、九番線と一〇番線の間は工事中の場所を隠すハリボテの壁に覆われていて、そこに「PLATFORM 9・3/4」という看板があったただけだったので。

このキングス・クロス駅は、ロンドンからスコットランドのエジンバラに行く列車の出発駅です。ハリ・ポッターたちがホグワーツに向かった駅がこのキングス・クロス駅だったのは、作者のJ・K・ローリングスがエジンバラで彼女のベストセラーを

執筆したと無関係ではないでしょう。

イギリスの中で、スコットランドがイングラントとは別に、ワールドカップへの参加資格をもっていることは日本でもよく知られるところです。日本ではあまり知られていませんが、人口わずか一〇パーセントのイギリス北部のスコットランドは、イングラントからの独立性と自律性をとても強調している点が印象的な地域でした。

この小論は、この冬訪れたスコットランドで考えたことから、この子どもの視点について再考してみることが目的としています。私自身、子どもの視点について、ずっと気になっているのですが、この言葉と同じように引っかけられている言葉に、リスペクト (respect) という言葉があります。スコットランドで見えてきたことを素材にして、この二つの関係について、考えてみたいと思います。

子どもの目の高さに立つ大人

子どもの視点について考えるために、それと関連

が深いと思われる、子どもの目の高さに立つということについて考えてみたいと思います。スコットランドの話に入る前に、まず、もうひとつ別の話をさせてください。

少し前にテレビで、興味深い場面を見ました。それは、子どものタレントのオーディションの取材の一場面でした。タレントをしている子どもたちは、児童労働が制限されている日本で、ごくわずかに大人のような職業的な活動に従事している子どもたちであるといってもいいでしょう。

私が見たのは、番組のレポーターが、子どもたちに、インタビューしようとした場面でした。レポーターの女性は身をかがめ、膝をついて一人の子どものマイクを向けました。するとその時、マイクを向けられた子どもは、レポーターと同じく自分もまた膝をついて身をかがめたのです。予期せぬ子どもの対応にレポーターは、慌てて、膝をつかなくてもいいのよ、と言って、子どもを立たせてオーディションについてのインタビューが始まりました。

その光景は、戸惑い慌てたレポーターのみならず、見ていた私たちにとつても思いもかけないものでした。レポーターが「子どもの目の高さに立つ」ために、身をかがめたのに、子どものほうは、一緒にしゃがんでしまったからです。

見下ろす視線

レポーターが、子どもの目の高さに身を縮めたのは、話を聞こうとする相手に対して見下ろす視線を向けることを避けようとしたからでしょう。見下ろす／見下ろされるという関係は、対等な関係ではありません。対等どころかそこには、威圧的な関係が生じることも予測されます。このレポーターは、物的に子どもの目の高さに立つて話すことで、子どもとの関係が威圧的な関係になることを回避しようとしたのではないのでしょうか。子どもの目の高さに立つことで、子どもとの対等な関係に近づくことができると考えているように思います。

しかし、実際に、レポーターが子どもの目の高さ

に身がかがめたら、子どものほうは同じように、身がかがめてしまった……。なぜでしょうか？

スコットランドの教育指針

この疑問について、スコットランドで目にしてきたことから考えてみたいと思います。

スコットランドで私は友人たちと一緒に、スコットランド政府の教育政策に携わるある機関を訪問しました。イギリスでは、現在ナショナルカリキュラムといわれる統一のかつ拘束力のある教育指針が出されていますが、スコットランドには、ナショナルカリキュラムに代わる独自の教育指針がありました。それはカリキュラム・フォア・エクセレンスといつて、そこには三歳から一八歳の子どもの教育について定められています。私たちが訪れた政府関係の機関は、三歳からでは不十分だといつて、『誕生前から三歳まで』^註という、三歳以下の子どもの教育にかかわる指針を表したガイダンスブックを作っていました。

そこにこう書いてあります。「大人が子どもたちに影響のある決定を行おうとするとき、かれらに必要なものは」「子どもに耳を傾けること、そして、彼らの視点を考慮すること」であると。

この、子どものケアにかかわる大人に、子どもの視点を求めるガイドブックは、四つの基本原則に基づいて構成されています。第一に「子どもの権利」、第二に「関係性」、第三に「応答するケア」。そして、私が注目したいのは最後の原則「リスベクトすること」です。リスベクトするべき事柄には、子どもの家族の言語的・民族的・宗教的背景といった文化の多様性といったものも含まれますが、子ども自身の価値観や社会的経験もまたリスベクトの対象となるとされています。

リスベクトという言葉

三歳未満の子どもをリスベクトする。というのは私には、ちよつと不思議な気がします。英語のリスベクト (respect) という言葉は、まずは、「尊敬す

る」を意味すると思うからです。三歳未満の子どもを尊敬するというのは、日本語の語感からすると妙です。

実は、この言葉に驚いたのはこれが初めてではありません。もう一〇年近く前になりますが、アメリカのミネアポリスにいた時、ミネソタ大学とミネアポリスにある公立小学校で、リスベクトという言葉を見たときにも同じように感じました。

一つは、ミネソタ大学の授業評価項目の中に見つけた「教師は学生をリスベクトしていますか」という項目です。もう一つは、公立の小学校で掲げられている「私たちは約束します。私たち自身をリスベクトすることを」という学校の教育方針でした。

私には、教師が学生を尊敬する、という表現も、小学生が自分自身を尊敬するという表現も意外でした。今回、スコットランドでみた三歳未満の子どもを尊敬するという表現はこの意味で同様の印象をもったのです。

同じ目の高さが意味すること

ここで「尊敬する」ではなく、「尊重する」と訳すれば違和感がないのかもしれませんが。しかし、私はここではあえて「尊敬する」という語感を含む言葉としてこだわってみたいと思っています。

スコットランドで、子どもの視点に立つことが、大人が子どものように小さくなることを意味していないことは明らかです。オーデイションで身をかがめた子どもは、大人が自分と同じように小さくなることを理解できず、自らが大人と同じように振る舞おうとして身をかがめたのではないのでしょうか。

小さいスコットランドは、大きいイングランドと対等であること、自律性をもっていることを非常に意識しているところです。大きなものが小さなものに合わせることを、小さなものは望んでいないのではないか、そんなふうに考えてみました。

(お茶の水女子大学大学院)